

ASC-US 判定で HPV 検査陰性の細胞学的検討

兵庫県臨床検査研究所¹⁾, 兵庫県立西宮病院²⁾

桑垣里茄¹⁾, 川嶋雅也¹⁾, 小林真¹⁾, 沖野毅²⁾

【はじめに】2024 年 4 月から、対策型子宮頸がん検診は HPV 検査単独法も適応された。当検査室では、婦人科細胞診検診時に HPV 検査同時依頼も受託している。ベセスダ 2014 には「意義不明な異型扁平上皮 (ASC-US)」は 5%以内であることが望ましいと記載されている。当検査室において、ASC-US/HPV 陰性の細胞学的検討を行ったので報告する。

【対象】2024 年 5 月から 2024 年 11 月までに行われた婦人科細胞診・HPV 検査（市町村検診、事業所検診等）が、同時に行われた 1008 件を対象とした。このうち ASC-US/HPV 陰性は 23 症例であった。検討には、同期間に検診以外のルーチン検体から細胞診検査にて ASC-US により HPV 検査追加依頼を行い HPV 陰性となった 34 症例も加えた。57 症例中、54 症例を再度、細胞学的検討を行った。婦人科細胞診は BD 社・SurePath™ 法、HPV 検査はロシュ社・cobas® HPV, BD 社・Onclarity™ HPV を外部委託した結果を参考に検討を行った。

【結果】54 症例中、コイロサイトの出現していたのは 20 症例、多核化した細胞の出現が見られたのは 16 症例、閉経時に見られる萎縮性変化に伴う細胞の腫大は 7 症例だった。また、3 症例が婦人科細胞診の結果が 1 年以内に継続して ASC-US 判定となった。1 症例が病理組織診断の結果は Polyp であった。

【まとめ】ASC-US は、炎症等による反応性、修復性の変化が認められる場合があり、判定に苦慮する場合が度々ある。HPV 陰性だった場合、HPV 検査の結果も踏まえた上で細胞診検査による NILM と ASC-US の判定が必要となる。そのため、形態学的所見と判定基準に沿った ASC-US の判定がより重要になると考える。